



都市文化研究センター（UCRC）の活動の概要と運営委員会

草生久嗣（文学研究科准教授，UCRC 副所長）

1. 活動の概要

都市文化研究センター（Urban-Culture Research Center; UCRC）は大阪市立大学大学院文学研究科内において研究・教育を支援し、関連諸事業を牽引するために設置されたものである（開設 2007 年）。文学研究科専任教員，UCRC 研究員，特別研究員（UCRC 研究員と兼任可）によって構成され，所属する大学院生，若手研究者へ研究活動に対する経済的・機会的支援や，その国際的な発信に向けた援助に重点的にとりくんでいる。

本センターは，そうした活動を，学内外の競争的資金を継続的に獲得することで行っており，今年度にもいくつかその採択および成果を得た。なかでも日本学術振興会の事業「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」への採択は，今年度以降 3 年次にわたるプログラムとして，これまで文学研究科が豊かに構築してきた国際的ネットワークを十全に活用する機会となり，次世代の専門家養成に資するものなることが期待される。また，昨年度に引き続き，学内競争的資金が獲得され「戦略的研究（基盤研究）：豊臣大坂城本丸周辺の地下探査による復元研究—文理融合・博学連携プロジェクト（研究代表者：仁木宏教授）」が取り組まれている。

文学研究科内において，専修・教室の枠を超えたメンバーの協働による将来性のある共同研究を開拓・推進するために，公募により「研究科プロジェクト推進研究」を採用して助成を行っている。2016 年度までに完了した「釜山大学校韓民族文化研究所と UCRC の共同研究プロジェクト（研究代表者：佐賀朝教授）」は，今後とも日韓機関間で継続する学術交流の基盤となることが予定され，また今年度新たに採択された 2 件のテーマはいずれも多分野間交流を促進するものであった。①テーマ「伝統芸能の近代化とメディア環境」研究代表者：久堀裕朗教授。②テーマ「明治維新以来の日本と諸外国の関係」研究代表者：北村昌史教授。

また研究成果発表媒体として，雑誌『都市文化研究』および英文電子ジャーナル『UrbanScope』を引き続き発行されている。また市民への成果還元の一環として，

上方文化講座の開催と文学研究科叢書の出版が行われる。

2. 運営委員会

2017 年度 UCRC 運営委員会委員は以下の通りである。

文学研究科研究科長：仁木宏教授（日本史学）

文学研究科副研究科長：小林直樹教授（国語国文学）

所長：佐賀朝教授（日本史学）

副所長（事務局長）：草生久嗣准教授（西洋史学），

事務局：石川優特任助教（UCRC），前田充洋（スタッフ）

運営委員会委員：大場茂明教授（地理学），佐近武講師（哲学），笹島秀晃講師（社会学），長谷川健一講師（ドイツ語・フランス語圏言語文化学），堀まどか准教授（アジア都市文化学）

以上のほか，UCRC 研究員もスタッフとして研究活動に参加しており，その活動は研究履歴と認められるものである。

●UCRC のホームページ

<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/>

2016 年度 戦略的研究（基盤研究）の活動 I

仁木 宏（文学研究科教授）

1. 研究課題

豊臣大坂城山里曲輪の石垣復元—文理融合・博学連携プロジェクト—

2. 研究組織

研究代表者（仁木）をふくめ，計 10 名で構成。文学研究科 3 名（仁木，塚田，岸本），理学研究科 2 名，大阪歴史博物館など市の研究機関 3 名，他大学 1 名，他府県の研究機関 1 名。

3. 研究目的・内容

豊臣期大坂城の本丸とその周辺については，江戸幕府大工頭中井家に伝わる「本丸図」がほぼ唯一の詳細な絵画資料である。しかし，中井図は 17 世紀の絵図であるため，誤差があることは避けられない。また石垣の高さ，城内の地表面の高低差などの情報も正確かはかりかねるところがある。こうした限界を克服するためには，ボーリング調査を，繰り返し広い範囲で実施することで，絵図の正確さやゆがみを測定するとともに，高低差の情報を収集するしかない。

本研究では，以上のような意図のもと，2015 年度に

引きつづき、本丸地区北端部ならびに山里丸地区（豊臣期の山里曲輪）の調査を実施し、その復元をめざした。ボーリング調査によって、豊臣期の石垣や地表面を検出し、平面上の位置を確定することで、この「本丸図」の正確さを確認する。あわせて海拔高度を測定し、石垣や豊臣期の地表面の高低差を測定し、豊臣期大坂城復元の一助とする。

4. 研究経過

4月、5月に予備的な打ち合わせを行った。本研究の採択決定後、現地踏査を実施して調査測線を決定し、また調査業者の選定などを実施した。第1次調査は、8月1日～3日、第2次調査は、9月23日～24日（合計5日間）実施し、中央開発株式会社の調査員2名が作業にあたった。研究代表者、ならびに研究分担者数名が監督にあたった。

その結果、豊臣期山里丸の北西隅付近の東西方向と南北方向の石垣の位置をおおよそ確定するにいった。また、豊臣期天守閣の北東隅付近、ならびに北西隅付近の石垣・裏込め、石垣の落ち込みなどの位置をおおよそ確定するにいった。これと「本丸図」を対照すると「本丸図」の正確さが一定程度確認された。

また10月27日、現大坂城本丸地区で表面波探査をおこなった。表面波探査は、人力によって地表面で加振した振動が表面波となって伝播する位相速度を解析するもので、これによって地下の構造が明らかになり、堀の位置や深さが判明する。京都大学防災研究所の釜井俊孝教授の協力を得、文学研究科・理学研究科の院生・学生に観測、警備を手伝ってもらった。その結果、豊臣期二の丸地区にあった巨大な堀跡の落ち込みを確認することができた。

12月17日、公益財団法人大阪市博物館協会・公立大学法人大阪市立大学包括連携協定企画；シンポジウム「『真田丸』の歴史学」を大阪歴史博物館にて開催し、数年来の調査成果を公開した。本研究にかかわっては、岸本教授（「豊臣大坂城はどこまでわかっているか」）、ならびに共同研究者の市川創氏（「見えてきた豊臣期大坂城本丸」）が研究発表を行った。また、これに先立つ、11月12日、NHKのプラタモリ#54大坂城・真田丸スペシャルで、三田村宗樹教授作成の「豊臣・徳川大坂城の3D地盤モデル」が紹介された。

年度末には、平成27・28年度、（大阪市立大学）戦略的研究・基盤研究と、平成27～28年度、（日本学術振興会）科研費・挑戦的萌芽研究による一連の研究成果をまとめた報告書を刊行し、関係者、関係機関に配布し、学術的な研究成果を広く公開した。

サウンディング調査については、あと数ヶ所の候補地を残す一方、表面波探査についてはその可能性が確認さ

れたので、引きつづき大坂城本丸周辺の地下探査による研究をつづけてゆく予定である。

2017年度 戦略的研究（基盤研究）の活動

仁木 宏（文学研究科教授）

1. 研究課題

豊臣大坂城本丸・詰の丸の地下探査による復元研究—文理融合・博学連携プロジェクト—

2. 研究組織

研究代表者（仁木）をふくめ、計10名で構成。文学研究科3名（仁木、塚田、岸本）、理学研究科2名、大阪歴史博物館など市の研究機関3名、他大学1名、他府県の研究機関1名。

3. 研究目的・内容

2017年5月、大坂城現地にて予備的な打ち合わせを行った。

7月28・29日、2016年度に引きつづき、ボーリング調査（サウンディング調査）を、現大坂城の本丸広場ならびに桜門周辺において実施した。本丸広場では、豊臣期の詰の丸の入口（虎口）の南側に位置する櫓台（櫓台状構造物）の正確な位置を確定するとともに、櫓台上面の標高を計測することを目的とした。1m間隔で延長5～10mの測線を、構造物の東側に2本、南側と西側にそれぞれ1本を設定した。この櫓台は、従来は、削平されて破壊されたと推定していたが、調査の結果、地中に遺存していることが確かめられた。

桜門内側西寄りでは、豊臣期の本丸南端の石垣、武者走り（守備兵が横移動するための施設）などの構造物の検知を目指した。調査によって、地下に構造物が遺存することが確認された。

表面波探査は、2019年2月、現桜門の南側の土橋部分で実施する計画である。この土橋は豊臣期の堀を埋めて設けられたと推定され、表面波探査によって堀の位置や形状を検知することを目指す。

こうして地下探査で得られた情報と、「豊臣時代大坂城本丸図」の描写、発掘調査成果を総合的・学際的に検討することにより、豊臣期大坂城中心部の研究を進める。櫓台や堀・防御施設の形状、正確な場所や高さ・深さなどを解明し、三次元の想定復元図を作成する。これまでなかったレベルの正確さで豊臣期大坂城の構造を解明できると考えている。

なお、数年来の調査成果を公開する催しとして、公立大学法人大阪市立大学・公益財団法人大阪市博物館協会包括連携協定企画、シンポジウム「秀吉の三都 聚楽・伏見・大坂」を、2018年1月8日（日）、大阪市立大学田中記念館にて開催する。共同研究者の松尾信裕氏（大阪歴史博物館）、仁木などが報告する予定である。

釜山大学校韓民族文化研究所とUCRCの共同研究プロジェクト

佐賀 朝（文学研究科教授，UCRC 所長）

1. 共同研究の概要

2015年度に研究科プロジェクト推進研究に採用されて国際共同研究を進めたのに続き、2016年度から17年度にかけて、本共同研究の仕上げにあたる研究活動を行った。なお、2016年度も本プロジェクトは科長裁量経費に基づく支援を受けた。

2016年度に主として行った共同研究に参加したのは、佐賀朝教授（日本史学）、伊地知紀子教授（社会学）、川野英二（社会学）、山祐嗣教授（心理学）、高島葉子准教授（表現文化学）の文学研究科教員5名である。

上記のメンバーが釜山大の5名の教員と共同研究を進め、2016年度の2016年7月に大阪市大で第4回共同研究会を開催し、釜山大メンバー5名全員と、共著論文集の内容に関して突っ込んだ質疑・討論を行った。

また、2017年3月には、佐賀・伊地知の2名がUCRC研究員であるジョン・ウンフィとともに釜山大に訪問し、共著論文集の編集打ち合わせと今後の共同研究に関する協議を行い、2017年秋までに行われる韓民族文化研究所の組織再編を待って、あらためて共同研究を今後も継続していくことを確認した。

2016年度後半に原稿執筆を進めた共著論文集は、2017年5月に同研究所『都市と共生』として刊行された。

2. 研究成果

上記の共著論文集に掲載された日本側（UCRC＝文学研究科）の研究者の論稿は以下の通りである。

- ・伊地知紀子「植民地解放後、済州島出身女性の渡日と生活世界」
- ・川野英二「大阪における都市セグリゲーションと市民生活の不安定化」
- ・高島葉子「都市の語りの課題と可能性」
- ・山 祐嗣「都市化における心理学的問題」
- ・佐賀 朝「近現代の大阪における社会的結合の解体と再編—町内会と下層労働力供給業を素材に一—」

頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム

佐賀 朝（文学研究科教授，UCRC 所長）

1. 国際共同研究の概要

ここ数年、日本史学専修では東洋史学専修・西洋史学専修と協力し、UCRCの支援も受けながら、日本学術振興会の本プログラムの申請を行ってきた。2017年9月、2017年度の「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」に採択されたとの通知がJSPSからあった。先行した頭脳循環「アジア」（2011～13年度）、同「EU」（2012～14年度）に続く、じつに5年ぶりの快挙である。

本研究課題のテーマは「周縁的社会集団と近代—日本と欧米におけるアジア史研究の架橋」である。本事業は、アジア諸地域における周縁的社会集団が、ヨーロッパ帝国主義の下、近世から近代への過程でどのように変容したかを、「排除」と「包摂」の経験に焦点をあて、世界的な視野で解明することを目的としている。日本の近世における周縁的社会集団に関する豊富な一次史料の存在と独自の社会構造分析の方法を活かして、欧米の日本史研究者や日本のアジア史研究者、さらにはサバルタン研究などの方法的蓄積がある欧米のアジア史研究者も加えた四者を架橋する形で新たな比較史と社会分析の方法的深化をはかり、多極的な近世～近代史像を構築しようとするものである。

国際共同研究の方法として、従来型の個別セミナーやシンポジウム等だけでなく、若手派遣研究者の活動と海外連携先の研究者の招聘を軸として「史料・方法融合型セミナー」や「史料読解ワークショップ」など、新たなスタイルを採用し、実践していく点にも特色がある。

研究期間は、2017～19年度の3年間である。

2. 研究組織

主担当研究者 塚田孝（文学研究科教授）日本近世史担当研究者

佐賀 朝（文学研究科教授）日本近現代史
井上 徹（本学 法人理事・副学長）中国近世・近代史
北村昌史（文学研究科教授）ドイツ近代史
草生久嗣（文学研究科准教授）ビザンツ帝国史
脇村孝平（経済学研究科教授）インド近現代経済史
安竹貴彦（法学研究科教授）日本近世近代法制史
森下 徹（山口大学教育学部教授）日本近世史
町田 哲（鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授）日本近世史

八木 滋（大阪歴史博物館主任学芸員）日本近世史
人見佐知子（岐阜大学地域科学部准教授）日本近代史
若手派遣研究者

上野雅由樹（文学研究科准教授）オスマン帝国史

彭 浩（経済学研究科准教授）近世東アジア史

守田まどか（UCRC 研究員）オスマン帝国史

島崎未央（UCRC 研究員）日本近世史

吉元加奈美（都市研究プラザ博士研究員）日本近世史
海外連携先

・イェール大学

ダニエル・ボツマン（同大学歴史学部教授，日本近世・
近代史）ほか5名

・シンガポール国立大学（NUS）

ティモシー・エイモス（同大学人文社会科学部准教授，
日本近世史）ほか3名

・ノースカロライナ大学シャーロット校

マーレン・エーラス（同校准教授，日本近世史）

・上海大学

張智慧（同大学文學院歴史学部副教授，日本近代史）

3. 初年度（2017年度）の研究活動

採択内定通知直後から準備を進め，初年度の若手派遣研究者の公募を，UCRC を通じて実施し，守田まどか氏の採用を決定した（2018年1月からイェール大学に派遣の予定）。

2017年11月8日には第1回国内個別セミナーを開催し，2017年度派遣予定者である島崎未央氏が「近世和泉における水車絞油屋の経営と地域社会」と題する研究報告を行い，多彩なメンバーで議論を行った。

2017年12月21日には，第2回個別セミナーを兼ねた本プログラムのKickOff ミーティングを開催し，主担当研究者である塚田孝氏が本事業の目的・計画とその研究上の意義について語るほか，最初の派遣若手研究者である守田まどか氏が研究報告を行い，議論する。本セミナーには，海外連携者であるシンガポール国立大学（NUS）のティモシー・エイモス氏，上海大学の張智慧氏も参加し，本共同研究に期待するところを語っていた。

2018年1月以降の予定としては，第3回学内個別セミナーを1月半ばに開催するとともに，1月に1名，2月には2名の若手研究者のイェール大学への派遣を実施する。また，3月下旬には，イェール大学で第1回海外セミナー，第1回史料読解ワークショップを開催する予定である。

なお，本事業のWEBサイトも2018年2月までにはオープンする予定である。

2017年度 文学研究科プロジェクト「伝統芸能の近代化とメディア環境」

久堀裕朗（文学研究科教授）

1. 研究の目的と概要

歌舞伎や人形浄瑠璃（文楽）などの日本の伝統芸能は，それらが成立・成熟した江戸時代の様式を今日に至るまで堅持してきたことが一つの特徴であるが，一方で明治以降，その内容は質的に大きな変化を遂げてきたことも事実である。そうした変化の背景として，例えば近世身分制の解体や，上演環境（劇場建築・経営）の変化など，様々な要因を挙げることができるが，メディア環境の変化もその大きな要因の一つに数えられる。本研究は，近代以降の伝統芸能の変容を，主にメディア環境との関係の中にも捉えようとするものである。共同研究に当たっては，考察の対象や時代を狭い範囲に限定するのではなく，日本と中国の事例の比較，歌舞伎と文楽の場合の相違など，様々な比較の視点を導入しながら，多分野の研究者が集うことによって，従来の文学・演劇学的分析にとられない多角的な研究を模索し，この方面の研究において新たな視座を獲得することを目標とする。

2. 研究組織

久堀裕朗（国語国文学）・松浦恆雄（中国語中国文学）・菅原真弓（アジア都市文化学）・海老根剛（表現文化学）・森節男（国語国文学，院生）・劉慶（奈良大学・梅花女子大学非常勤講師）・坂本美加（大阪市立大学・京都造形芸術大学非常勤講師）

3. 研究経過・予定

2017年9月15日（金）に打ち合わせ会議を行って全体の研究の進め方を決定し，11月16日（木）に第1回研究会「『酒吞童子話』の伝承—文楽と淡路座の近代—」（久堀）を開催した。今後，毎月研究会を行い，年度末の2018年3月24日（土）に研究成果報告会・復曲浄瑠璃演奏会の開催を予定している。

2017年度 文学研究科プロジェクト「明治維新以来の日本と諸外国の関係」

北村昌史（文学研究科教授）

日普修好通商条約（1861年）締結150周年前後から，

日本とドイツが取り結んだ様々な関係が、新たな事実の発掘を伴いつつ再検討がはじまっている。従来は、お雇い、帝国憲法の成立など日本の近代化と密接にかかわる領域がもっぱら取り上げられてきたのに対して、近年の研究は、両国の関係を、文化、芸術、建築、人的交流など、「近代化」にとどまらない、より広いコンテキストの中で取り上げている。本プロジェクトは、こうした研究の動向をさらに発展させることを課題とする。

日独の関係とこいつつ、実際にはこの2国間の関係からだけで機能していたわけではない。日独の間の「線」を理解するためにも、視野を、両国を取り巻く「面」に拡大して検討する必要があるのである。とはいえ、現在の研究動向を見ても、議論を「線」の事件に収れんさせる傾向が強いことは明らかである。

以上、本プロジェクトは、日本と様々な外国との関係を、取り上げる題材でも空間的枠組みにせよ複眼的にとらえていこうというものである。複眼的にとらえるということから、必然的日本人と外国との関係を直線的に描くことはせず、その関係が、「構築され/構築されなす」プロセスとしてとらえることになる。メンバーは、ドイツ、日本、ソ連、トルコをまたにかけて活動した建築家ブルーノ・タウト（1880-1938）を研究する研究代表者の北村（文学研究科教授）、大日本帝国憲法に影響あたえたローレンツ・シュタインを研究対象とする松居宏枝（UCRC 研究員）、ドイツの企業グループの対日本事業をあつかう前田充洋（UCRC 研究員）、およびオスマン帝国史の上野雅由樹（文学研究科准教授）によって構成される。

第1回の研究会を11月14日（報告者：北村）、以降第2回を12月8日（報告者：松居）、第3回を1月16日（報告者：上智大学研究員堅田智子および前田）を予定しており、2月と3月にも各一回の研究会を開催する予定である。

『都市文化研究』編集委員会

岩本真理（文学研究科教授）

1. 2017 年度委員

- 磐下 徹（文学研究科准教授、日本史学）
- 山 祐嗣（文学研究科教授、心理学、編集主任）
- 祖田亮次（文学研究科教授、地理学）
- 岩本真理（文学研究科教授、中国語中国文学、編集委員長）
- 白田由樹（文学研究科准教授、ドイツ語フランス語圏

言語文化学)

- 山崎雅人（文学研究科教授、言語応用学）
- 菅原真弓（文学研究科教授、アジア都市文化学）

2. 前年度からの変更

- ・前年度の委員の半数が入れ替わり、新たな体制で編集業務を行っている。
- ・編集主任 岩本真理（2016 年度）→山 祐嗣（2017 年度）

電子ジャーナル UrbanScope 編集委員会

北村昌史（文学研究科教授）

2016 年度発行の 8 号から従来の「翻訳」と「論文」に加え、「特集」を適宜取り入れることになった。8 号は、2016 年度の編集委員のもと、日本中世医療社会史に関する特集号となった。オレゴン大学（合衆国）のグローバル教授による当該テーマに関する論文を軸に、中世史を専門とする文学研究科の仁木教授と日本近世医療史の住友史料館主席研究員海原亮博士のコメントにより構成されている。残念ながら、翻訳と論文は掲載できなかったが、充実した誌面となった。2017 年度の新しい編集体制（北村、関、添田、佐金）による 9 号でも、2017 年 2 月開催された、文学研究科プロジェクトの国際セミナー「環境史・環境誌の中の合同生活圏」に基づく特集を企画している。9 号は、この特集にくわえ、文学研究科の専任教員の業績の翻訳を掲載する予定で、文学研究科の研究活動の海外発信の役割にふさわしい誌面となるはずである。

文学研究科叢書 編集委員会

草生久嗣（文学研究科准教授）

文学研究科叢書第 10 巻『文化接触のコンテキストとコンフリクト—EU 諸地域における環境・生活圏・都市』の刊行を予定している（2018 年 3 月予定）。本書は、日本学術振興会頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「EU 域内外におけるトランスローカルな都市ネットワークに基づく合同生活圏の再構築」（平成 24～26 年度）の研究成果をもとに、国内外の研究者

を招聘して開催された平成27年度大阪市立大学国際学術シンポジウム「文化接触のコンテキストとコンフリクト—EU諸地域における環境・生活圏・都市」（平成27年12月4～6日）の内容を、発表者による寄稿ならびに当日の総合討論を含めてまとめたものである。13名の執筆者を擁して解題記事3篇、パネル寄稿8篇、ディスカッション記録1篇を掲載する予定である。編者は大場茂明（編集長）、大黒俊二、草生久嗣。